Vol.2019-ASD-16 No.1
2019/12/6

高齢者に提供する食事形式が コミュニケーション行動に及ぼす影響 ～和食レストランでの会食を対象に～

徳永弘子[1]　花井俊孝[1]　木村敦[2]　武川直樹[1]

概要：本稿では，高齢者を対象に、和食レストランにおいて提供される食事形式の違いとコミュニケーション行動との関係について報告する．高齢者 6 人 1 組計 4 組に対して和食レストランにおいて同一メニューを，銘々膳形式と共食器形式により提供し食事会話の映像を収録した．食事映像を用いて提供する形式ごとの高齢者の会話を比較，分析した。その結果，1）共食器形式は，取り分け行為が第二の会話を生み，インタラクティブな会話の場を生成する役割を持つことがわかった。また、2) 銘々膳形式は，自己開示発話を引き出し，参与者同士の親密度を上げる役割を持つことを示唆した．これにより，集まる仲間の親密度や会話の目的に応じて，効果的な食事形式を選択することが効果的であることが示唆された．

キーワード：銘々膳形式，共食器形式，会話の分裂，自己開示

Effects of Meal Styles on Elderly Persons' Communication Behaviors During Dining in Japanese Restaurant

HIROKO TOKUNAGA[†1]　TOSHITAKA HANAI[†1]
ATSUSHI KIMURA[†2]　NAOKI MUKAWA[†1]

Abstract: In this paper, we report on the relationship between the meal styles served on tables in Japanese restaurants and communication behaviors for elderly people. Communication behaviors of a set of 4 groups of 6 elderly people during eating were video recoded. Using the recoded video, we analyzed and compared the conversation behaviors of elderly people between the two styles: share plate style and individual plate. The results suggest that 1) "share plate style" has a function to generate interactive conversation environment where the second conversation topic takes place and is maintained in parallel with the first topic conversation. 2) "individual plate style" has a function of extracting more self-disclosure utterances so that the intimacy between participants increases. This can suggest that effective communications were produced by selecting an appropriate plate style according to the intimacy of participants and the purpose of the conversation.

Keywords: Individual plate style, Share plate style, Schisming, Self- disclosure

1. はじめに

我が国は高齢社会であり，65 歳以上の者のいる世帯のうち単独世帯（一人暮らし）は 27%を超える[1]．それに伴い高齢者の孤食やコミュニケーション不足が懸念されている．一方，一人暮らし高齢者の「現在の楽しみ」の調査報告によると「仲間とのおしゃべり」「食事」が上位を占めている[2]. こうした欲求に対して，自治体などは高齢者を対象に，定期的な食事会を開催し，外食のきっかけを作り，交流の場を提供している（例えば[3][4]）．地域の集まりに対する高齢者側の期待を調べた報告によれば，栄養バランスなどの食事機能，出かけることによる刺激，おしゃべりなどの交流，が挙げられている[5]．よって食事を介した高齢者同士の交流の場をサポートすることは，今後ますます重要な課題になると考えられる．

本研究は高齢者同士のコミュニケーションが促進され，心の通い合う仲間づくりに寄与する食事環境をデザインすることを目指している．これまで筆者らは食事中の人の行動分析から，人の食べる行為と話す行為は相互に影響し合うことを明らかにしている．会話の聞き手はコミュニケーションを維持するために，相槌のタイミングを避けて摂食したり，多人数の共食会話において会話の関与の度合いが低い場合には，他の聞き手に相槌を任せ自身は摂食するなど，その場に応じて食べる/話すことを調整している[6]．そうした人の行動をもう少しマクロな視点から捉えると，会話の行動は食事形式にも影響を受けると考えられた．そこで本稿では食事形式の違いとコミュニケーション行動の特徴を明らかにすることで，高齢者同士の関係構築をサポートする食事環境を提案する．

分析のため，異なる食事形式による高齢者の食事会話映

1 東京電機大学
Tokyo Denki University.
2 日本大学
Nihon University

ⓒ2019 Information Processing Society of Japan

像を収録した．具体的には，和食レストランで 6 人一組からなる高齢者に，和食の定番である銘々膳形式と，共食器から取り分ける共食器形式による食事をしてもらった．この映像から食事中の高齢者の会話を二つのアプローチにより分析する．

一つ目のアプローチは会話分析の手法を用い，会話の分裂の現象を分析する．会話の分裂とは，4 人以上の会話参与者がいる場合に生じるもので，話し手と聞き手の組が二つ以上できる状態である．多人数会話の場合，話し手が一人でその他全員が聞き手になると，一人当たりの発話機会が少なくなる．しかしここで会話が分裂すると，参与者らは発話の機会を得やすくなる．他者とたくさん会話をするためには，一人が長く話すよりもしばしば会話の分裂が起きることが望ましいと考える． Sacks らによると，多人数会話において会話の分裂が起きるメカニズムは，限られた参与者が順番交替を繰り返す場合，順番取りに偏りが生じるため，順番を取る機会のない者たちが自分たちで第二の会話を開始することにより発生するという[7]．本研究は食事会話を対象とするため，高齢者らは食べることと話すことを同時に進めている．よって，食事行動が第二の会話の開始を抑制，または促進することに影響する可能性がある．そこで，食事形式ごとに会話の分裂を調べ，食事形式が現行の会話に参与しない者にどのような影響をもたらすかについて明らかにする．

二つ目のアプローチは社会心理学の観点より自己開示[8]の発話に着目する．自己開示はありのままの本当の自分を他者に伝える行為で，内容としては自分の性格や身体的特徴，考えていること，感じていること，経験や境遇など自己の性質や状態を表す事柄が含まれる．大坊ら[9]によれば，自己開示は二つの機能を持つという．一つは個人の精神的健康に関わる機能で，感情浄化，自己明確化，社会的妥当化に作用する．もう一つは対人的な機能で，他者との関係発展，社会的コントロール，親密感を調整に作用する．よって仲間に自分の本心を話すと，心に溜めていた感情が浄化されたり，他人から妥当性を評価してもらったりすることができる．また，自己開示の特徴として，返報性の規範がある．これは，人は相手から自己開示を受けたら，同等の自己開示をお返ししようとする習慣があるというもので，これにより，自分の心の内を開示することで他者の心の内も開示され，相互に相手を深く知り得ることを可能とする．本アプローチでは，食事中の高齢者らの会話データから，実際の自己開示が表出される頻度を調べ，高齢者同士の相互理解を促す事に貢献する食事形式を明らかにする．

以上，銘々膳形式，共食器形式における食事会話に対し，会話の分裂からインタラクティブな交流を，自己開示発話から高齢者間の内部状態を含めたやりとりを促進する食事形式を明らかにし，高齢者同士がより関係性を強めることに寄与する食事のデザインの構築を目指す．

2. 映像収録実験と環境デザイン

共食実験は和食レストランの個室において 2018 年 8 月から 9 月の期間，8 回行われた．実験協力者は 6 人 1 組，計 24 人 4 組（A, B, C, D）で，地域のシルバー人材センターの公募により集まってもらった．以下に，詳細を記す．

2.1 実験協力者

65～80 才（平均年齢 72.5 才 *SD*=4.4）の男女 24 人（男性 11 人，女性 13 人）である．協力者らは地域のシルバー人材センターにおいて仕事をしたりサークル活動に参加したりしている．6 人それぞれの間柄は，一緒に仕事をしている，顔は見たことがある，初対面，など様々であった．ただし，4 グループのうち今回同席する 6 人が一緒に食事をしたことがあるグループはなかった．また，実験者側からグループ内の男女比，親密度の統制は行わなかった．

(a) 銘々膳形式による食事
(a) Co-eating served in individual plate style

(b) 共食器形式による食事
(b) Co-eating served in share plate style

図 1　A グループの共食会話のシーン
Figure 1　Co-eating scene of group A

ⓒ2019 Information Processing Society of Japan

2.2 食事形式

日常的に人々が利用するレストランで提供される一般的な食事形式は，会席料理のように一人ずつ配膳される形式と，中華料理のように共食器から皆で取り分ける形式がある．そこで和食レストランに依頼し，定番の銘々膳形式（以降，銘々膳と記す）による食事と，共食器から取り分ける形式（以降，共食器と記す）による食事の 2 つの形式を用意してもらい，実験を行った．実験は 1 グループにつき 2 回に分けて 2 つの形式の食事を行い，1 回目と 2 回目は約 3 週間の期間をあけた．実験においては 2 つの食事形式の間に順番効果が影響しないよう，カウンターバランスをとった．各条件ともに食事は 11 時 30 分に開始し昼食を想定した．

2.3 食事メニュー

食事のメニューは，刺身ばらチラシ・あさりの味噌汁・てんぷらの盛り合わせ・ローストビーフサラダ・彩り野菜のディップ・デザート（アイスミルクレープ）・お茶（温/冷）である．食事形式に関わらず食事の内容は同じである．A グループが銘々膳，共食器により食事をしている様子を図 1 に示す．

2.4 映像収録

共食中の様子は映像に記録した．カメラは各協力者の正面撮影用と俯瞰用に GoPro 製 CHDCB501 を使用した．またテーブル中央にコダック製 SP360 4K を設置し，全方位を撮影した．映像収録環境を図 2 に示す．

協力者の音声録音は IC レコーダ（ソニー製 ICDPX470FBC）を用いた．IC レコーダは図 3 のようにネックフォルダに収納した．

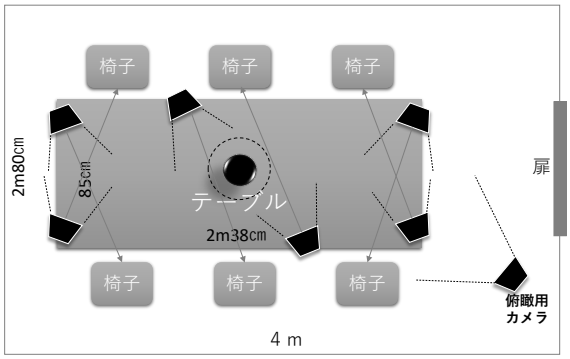


図 2　共食会話の映像収録環境

Figure 2　Video recording environment for co-eating

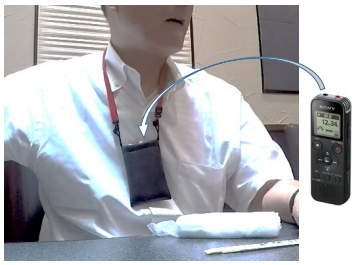


図 3　IC レコーダ収納用ネックフォルダ

Figure 3　Neck holder to insert IC recorder

映像の録画は，実験者の退室と共に開始された．食事の様子がわかるよう俯瞰用のカメラとタブレット端末を WiFi で接続し，実験者は店の外からモニタリングした．実験者は食事が終了したと判断されたところで入室し，撮影を終えた．撮影時間は表 1 の通りであった．

表 1　各グループにおける食事形式ごとの収録時間

Table 1　Recording time for each meal style in each group

グループ	銘々膳	共食器
A	75 分 (1)	75 分 (2)
B	75 分 (2)	78 分 (1)
C	66 分 (1)	70 分 (2)
D	60 分 (2)	58 分 (1)

(　)内は実施回

なお，本実験は東京電機大学ヒト生命倫理審査委員会が定めるガイドラインに沿って行い，協力者，協力店の配膳担当者にはビデオカメラで収録した映像や静止画を学会誌などに掲載することへの同意を得た．

3. 各グループの特徴と会話内容

本章では，各グループの男女比，関係性，実際に話された会話のテーマについてその概略を述べる．

A グループ

68 才から 77 才の男性 1 名，女性 5 名からなる．この 6 人はシルバー人材センターにおいて同じ仕事をしていた経験がある．会話全体を俯瞰してみると，女性のうちの 2 人が話題提供をする場面が多く，シルバー人材センターでの出来事や，自宅での日常生活，体調や病院の話が中心であった．食事の量が多かったとの感想で，映像からも他のグループに比べ多めの残飯が確認された．

B グループ

67 才から 78 才の女性 6 人のグループである．6 人はセンターにおけるいくつかの仕事で過去に数回，顔を合わせたことがあるが常に同じ職場で共にしているわけではない．全員女性ということで，提供された食事の味や作り方，またそこから派生する家庭での調理の仕方などの話で盛り上がる場面が多く観察された．話が盛り上がり，銘々膳形式，共食器形式共に最も食事時間が長かった．

C グループ

65 才から 78 才の男性 4 人と女性 2 人のグループである．事前の関係性において 4 組のグループのうち，最も親密度が低いグループであった．よって共通の話題に乏しく，沈黙する場面が多く観察された．ある 1 人が話題提供するとしばらくその 1 人が話し続け，他の 5 人が聞き役にまわる会話パターンが多かった．

D グループ

67 才から 80 才の男性 6 人のグループである．同一の職

ⓒ2019 Information Processing Society of Japan

場で顔を合わせることが多いとのことで，和気あいあいとした雰囲気の中で会話が進んでいた．最近のニュースやテレビ番組の話や，自分たちの若い頃の経験と現在の若者との違いなどが話題に上っていた．食べる速度が速く，食事時間は銘々膳形式，共食器形式共に最も短かった．

4. 会話データのアノテーション

銘々膳形式の会話合計時間 276 分，共食器形式の会話合計時間 281 分の会話内容に対し，人の行動に注釈をつけるためのフリーソフト ELAN1を用いてアノテーションした．筆者のうち 2 人が，各協力者の音声を聞きながら，タイムラインに沿って一つのトピックで会話している区間を切り出し，トピック名を付与した．会話が分裂し同じ時間に二つのトピックが存在する場合には，二つのトピック名を付与した．

さらに自己開示の発話箇所にはその内容をアノテーションした．自己開示発話の認定は[10]に倣って，「発話者自身が主語（主部）＋主語にかかる述語とそれを修飾する語からなる述語」を抽出し，その箇所の中の 1 文を 1 回の自己開示の箇所とした．なお，話し言葉においては，しばしば主語が省略される.その場合は前後の文脈から主語を補い，自己開示の箇所とした．

5. 結果 1　会話の分裂

会話中に生じる会話の分裂の回数をカウントした．食事を伴う会話において，食事のメニューや食事動作をきっかけに第二の発話が生起する可能性が考えられた.そのため，会話の分裂が目の前の料理や調味料など起因するものであったか（料理），料理以外の話題であったか（その他）について分類した．

5.1 会話の分裂回数

会話の分裂回数の結果を表 2 に示す．会話の分裂において最も多かったのは女性 6 人からなる B グループの共食器形式の 41 回であった.男性 6 人からなる D グループの銘々膳形式では会話の分裂は 0 回であった．

いずれのグループとも銘々膳形式よりも共食器形式の方が会話の分裂回数が多かった．銘々膳形式で分裂のあった A, B, C の 3 グループについては，共食器形式で会話の分裂がそれぞれ 1.5～4.6 倍であった．また会話中様々な話題がある中で，目の前の料理が第二の会話として会話の分裂のきっかけになっているケースが共食器形式で多く見られた．

5.2 会話の分裂事例

表 2 に示す分裂回数には，醤油やドレッシングの受け渡しや，「美味しい」「ちょっと辛いね」などの味の評価による一瞬の会話の分裂が多数含まれていた．しかし，やりとりがおよそ 15 秒以上続くケースが銘々膳形式で 4 回，共食器形式で 10 回確認された．具体的には銘々膳形式においては，現行トピックの傍らで，向かい合う二人の参与者がどのタレをどの料理につけて食べるのかわからない，と 20 秒近く相談し合っていたり，お茶のポットを持ちながらお茶のおかわりを聞いて回ったりしていた．

表 2　会話の分裂回数
Table 2　Number of schisiming

グループ	銘々膳形式			共食器形式		
	料理	その他	**合計**	料理	その他	**合計**
A	4	1	**5**	11	2	**13**
B	5	4	**9**	16	25	**41**
C	1	3	**4**	5	1	**6**
D	0	0	**0**	2	1	**3**

共食器形式においては，銘々膳形式でも見られたお茶のおかわりを尋ねるケースが確認された他，料理の終盤で共食器に残っている食べ物をすべて取り分けてしまわないともったいない，などと話しながら，まだ取り分けていない人はだれかといった会話が 15 秒以上第二の会話として継続していた．

5.3 共食器形式における特徴的な会話の分裂事例

共食器形式においては，取り分け行為が新たな会話の産出に寄与する場面も観察された．例えば，現行のトピックにおいて会話の順番を取らない参与者らが，共食器に視線を向け取り分けているうちに，食材に関する話題からある一人の参与者の個人的な好き嫌いの話に移行した．これが第二の会話となり，ここで参与する他のメンバーが自身には好き嫌いがないなど，食事の嗜好についての情報交換が行われていた．共食器形式による共食において，“共食器”は参与者らの共有物である．そのため，皆で視線を共食器に向けることは自然な行為であり，共通のトピックになる可能性がある．“共食器”が話題提供のツールとなり，先行する会話で順番をとらない参与者らが，第二のトピックを開始していた．

さらに共食器から取り分ける行為が，距離的に離れている参与者同士にインタラクションをもたらすシーンが観察された.図 4 にトランスクリプトを示す.図 4 は男性 4 人，女性 2 人からなる C チームの共食器形式の会話の断片である．食事が始まってから約 20 分が経過し食事は終盤にさしかかっている．事例の前には，図 4 写真右中央に座る緑木（仮名：以下同様）が車を運転していると右側を走る自転車が危なく感じるという話をしていた．その話がひと段落したところで，右手前側に座る青木が「あれ　ハーレーハーレー乗ってる人とはあれするけど.」(01)とハーレーに乗ってツーリングをする左手奥側の黒木に話しかけた．青

1 https://tla.mpi.nl/tools/tla-tools/elan/

01 青木：あれ　ハーレー　ハーレー乗ってる人とはあれするけど．
02 黒木：うん．
03 青木：他の外　外車　あー　外国のオートバイたくさんあるじゃないですか．
04 黒木：うん　うーん．
05 青木：メーカー．
06 黒木：うーん．
07 青木：そういう人たちはつるんでは行かないの．
08 黒木：行かない．入れさせない．
09 青木：ハー　ハ　ハーレーだけが行くわけ．
10 黒木：うーん．
11 黒木：ハーレーオーナーズ　ハーレーオーナーズクラブっつう会員じゃないとダメなんだ．
12 青木：あー．要するに（L）．
13 黒木：うん．
14 青木：あれ　俺たちはハーレーだよってことで．
15 黒木：いや．そうゆうわけじゃないけど．
16 黒木：あのー　エイチ　オー　ジーってね　ハーレーオーナーズクラブの会員で．
17 黒木：の集いだからね．
18 黒木：そんで最近色んな人　走ってんでしょ
19 黒木：だから昨日は特にうるさかった．台数多いから．

24 黒木：あのー　イエローフラッグってね　旗あんですよ。
27 青木：ふーん．
29 黒木：クラブのね．
31 青木：うん．
32 黒木：それを絶対つけて来いって．

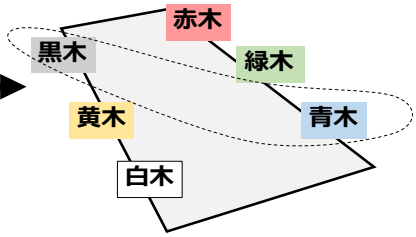
36 黒木：バイクに．

38 黒木：前から決まってんだけどね．

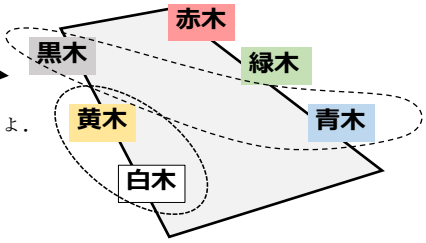
41 黒木：それから

45 黒木：ベストね．

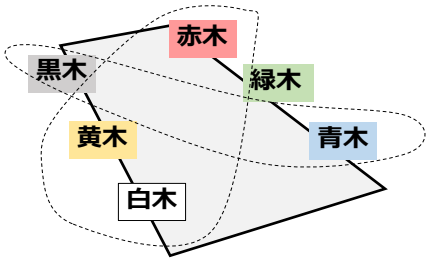
49 黒木：ベストで後ろに名前入ってるんですわ．
50 青木：あー．
51 黒木：あ　あのー　○○[所属名]．
53 青木：うーん．
54 黒木：○○[所属名]ってね．
55 青木：そのなんとかね．うん．
56 黒木：うん．それを着用ね．
57 青木；へー．



20 黄木：あ　あ．
21 白木：そ．
22 黄木：野菜やってないでしょ．
23 白木：うん．
25 黄木：食べた?
26 白木：あー．ううん．私ーは　あの．



28 黄木：ごはんは？
30 白木：うん．
33 白木：うん　うん．
34 黄木：ご飯もある．
35 白木：あ　あと．
37 赤木：野菜．



39 黄木：もうあれはないの．
40 白木：はい　はい．
42 赤木：ご飯．
43 黄木：あれないからね．
44 白木：はい．
46 赤木：うんいいの．野菜あんでしょ？
47 黄木：お肉はないよ．
48 白木：え　ミニ　ミニ　ミニトマトいかがですか？

52 白木：のっけますよ．ミニトマト．

図 4　離れて座る高齢者同士が会話するシーンのトランスクリプト

Figure 4　Transcript of a scene in which elderly parsons sitting away from each other have a conversation

木がハーレーに乗っている人がオートバイを連ねてツーリングする様子を目にすることがあるが，その中に他の外国のオートバイに乗っている人はいないのか，との趣旨の質問をし((03)～(07))，黒木が「ハーレーオーナーズ　ハーレーオーナーズクラブっつう会員じゃないとダメなんだ．」(11)と説明した．

しかし，黄木，白木，赤木，緑木は視線を各自の食事に向け，黒木と青木の話に反応することなく食事を進めてい

ⓒ2019 Information Processing Society of Japan

た．黒木の発話(16)付近から白木が共食器に注意を向け始め，それに気づいた黄木が白木に「あ　あ.」(20)「野菜やってないでしょ.」(22),「ご飯は？」(28)とサラダやご飯の取り分けを促している．青木と黒木によるハーレーの話の傍らで，黄木と白木による食べ物の取り分けの話が産出され会話が分裂した．

黄木と白木のやりとりを見た赤木が自身の小皿を黄木に差し出し，「野菜（をのせてほしい）.」(37)と言った．黄木は「もうあれ（ローストビーフ）はないの.」(39)とサラダにのっていたローストビーフはもうなくなってしまったと応答した．白木は，野菜の素揚げに添えられていたミニトマトも一緒にどうかと尋ね(48) 3 人の会話となった．その間，青木と黒木によるハーレーの話も継続していた．

ここで，ハーレーによるツーリングの会話をしていた青木と黒木は 6 人掛けのテーブルの対角に位置していた．よって会話をするには遠いが，2 人の共通の興味であるハーレーのトピックが 2 人をつないでいた．さらにそれを跨ぐ形で赤木，黄木，白木の取り分け行為が行われていた．本事例からは，“共食器” が共通のトピックを提供するだけでなく，先行するメイントピックと同等の効力で，離れて座る者同士をつなぐ役割を果たすことが示された．

5.4 考察

会話の分裂について検討したところ，共食器形式の会話に多く発生する可能性が示された．これは，人の行為として銘々膳形式における『食べる』『話す』に加え，共食器形式では『取り分ける』行為があるため，そもそも他者とのインタラクションが発生しやすい環境がベースに作られていたと推測される．

事例分析では，共食器からの取り分け行為が現行トピックにおいて発話の順番を取らない参与者に，新たな第二の会話の開始をもたらす場合があることが示された．これは高齢者が多人数で会話をする際，共食器が参与者らに共通の話題として発言の機会をもたらし，コミュニケーションのツールとして機能したと考えられる．さらに『取り分ける』という共食器形式の特徴が，参与者らのコミュニケーション行動に影響し，離れて座る参与者同士もつながることができるダイナミックな食事の場を作り上げていたと考えられる．

6. 結果 2　自己開示の生起頻度

今回収録した 4 グループのうち，女性 6 人の B グループ，男性 6 人の D グループのデータを分析する．自己開示量は異性よりも同性同士に多く見られる報告[11]があることから，今回は同性同士のグループを対象とする．

本会話映像は一般的なレストランで収録されたため，会話中，店員が配膳や下膳のタイミングで，協力者らへの声掛けが行われるシーンも含まれている．そうした場合，発話の中断や中止が認められるケースがあった．そこで影響を排除するため，分析時間は，アノテーションした会話データのうち店員の配膳開始から食事後の下膳前までを切り出した．その結果，B グループと D グループの分析対象時間の合計は銘々膳形式で 76 分 55 秒，共食器形式で 100 分 40 秒であった．

6.1 トピック数と自己開示発話数

次に自己開示発話数をカウントした．ここで，自己開示は 1 章で述べた通り，開示されたら同等の自己開示を返すという返報性の規則を持つ．一つのトピックの中で自己開示のやりとりが多ければ，その分相手の情報を多く知り得ることになると考えられる．そのため，単に自己開示の総数を比較するのではなく，1 つのトピックの中での自己開示数を分析する．そこで，分析対象時間内における各食事形式のトピック数，自己開示数をカウントし，1 トピック当たりの自己開示の生起回数を算出した．結果を表 3 に示す．

表 3　各食事形式の自己開示発話生起回数
Table 3　Number of self-disclosure utterances in each meal style

食事形式	トピック数	自己開示発話数	自己開示発話数／トピック
銘々膳	124	600	4.8
共食器	233	636	2.7

表 3 から, 1 トピック当たりの自己開示の発話数は, 銘々膳形式においては 4.8 回，共食器形式においては 2.7 回であることが示された．よって，1 トピックにおいて産出される自己開示は銘々膳の方が多かった．

6.2 自己開示発話に対する取り分け作業の影響

共食器形式においては，取り分け作業の必要性から個人の話よりも目の前の共有物の話を優先する場合が考えられる．映像観察から共食器からの取り分け作業は，食事開始後に起き，さらに食事の後半で共食器に残った食べ物を進め合う行動が観察された．こうした取り分け行動が自己開示発話の産出に影響した可能性を探るため，全会話時間を 3 区分し 1 トピックに対する自己開示発話数を算出した．会話を序盤，中盤，終盤とし結果を表 4 に示す．

表 4　各食事形式の会話 3 区分における
トピック数と自己開示発話数
Table 4　Number of topics and self-disclosure utterances in three categories of conversation for each meal style

食事形式		序盤	中盤	終盤	合計
銘々膳	トピック数	50	37	37	124
	自己開示発話数	236	161	203	600
共食器	トピック数	98	69	66	233
	自己開示発話数	259	215	162	636

ⓒ2019 Information Processing Society of Japan

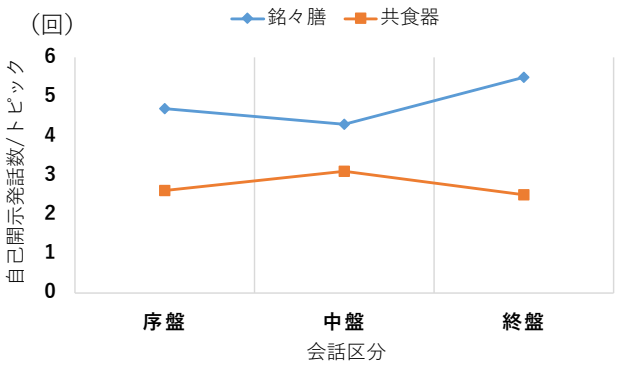


図 5　会話 3 区分における
トピック当たりの自己開示発話数
Figure 5　Number of self-disclosure utterances per topic in three categories of conversation

表 4 よりいずれの食事形式においても会話序盤でのトピック数，自己開示発話数が多く中盤，終盤において少なくなる傾向にあった．また，1 つのトピック内で生起する自己開示数を算出した．結果は図 5 に示す通り，銘々膳形式では序盤で 4.7，中盤で 4.3，終盤で 5.5，共食器形式においては序盤で 2.6，中盤で 3.1，終盤で 2.5 であった．

以上をまとめると，銘々膳においては中盤と終盤でトピック数は少なく，終盤では 1 トピックの中で産出される自己開示が多い．共食器は，序盤においてトピック数は多いがそれに対して自己開示は少なく，さらに終盤ではトピック数も自己開示も少ないことが示された．

6.3 考察

1 つのトピックに含まれる自己開示発話をカウントした結果, 銘々膳の方が共食器よりも多かった. すなわち銘々膳の方が話題の深堀がなされ，その話題に対する協力者らの情報交換が多くなされていると考えられる．今回，銘々膳形式で 76 分 55 秒，共食器形式で 100 分 40 秒を対象にトピックと自己開示発話をカウントした．分析時間には誰も発言していない無音区間を含むため，今後トピックの継続時間を精査する必要があるが，分析時間を今回示したトピック数で割ると，1 トピックの継続時間は銘々膳形式でおよそ 37 秒, 共食器形式ではおよそ 26 秒である. これは，銘々膳形式の方が一つのトピックの継続時間が長く，そのため含まれる自己開示発話も多い可能性が考えられる．

また，共食器からの取り分けと自己開示発話の少ないことの関連を調べるため，会話を 3 つに区分し検討したところ，取り分けが発生する序盤と後半に自己開示発話が少なかった．共食器形式は個人的な話をするよりも，取り分けという共同作業に従事するのが場にふさわしい場合がある．また，トピック進行中に取り分け作業が始まると，それまでの会話を中断したり終了したりして，取り分けに参加する場合もある．そうした共食器形式の特徴が自己開示を抑制させた可能性がある．この会話区分とトピック当たりの自己開示数の関係分析から，銘々膳形式では終盤に 5.5 回と最も多かった．これは終盤に多くの，あるいは深い自己開示発話が出現していることを示す．序盤，中盤でゆっくり語り合い十分なアイスブレイクがなされ，終盤に深い自己開示が導かれたと推測され，仲間との相互理解を目的に食事を楽しむ場合には，銘々膳による食事が適している可能性がある．

自己開示は表面的，周辺的な内容から，心の内に秘めた内容までさまざまある．「食べ物の味の好み」や，「趣味」の話題は比較的浅く，誰でも話しやすい内容であると考えられるが,「体調の心配」「まとまったお金の悩み」「これからの生き方の悩み」など現在や将来に関する悩みは，老年期特有の自己開示とされている[12]. 今回の映像からも「現在抱える病気のセカンドオピニオン」や「人生の終活における必要な断捨離」などの自己開示発話が 10 回カウントされたがいずれも銘々膳形式においての発話であった．一つのトピックで多くの自己開示発話が産出されること，十分なアイスブレイクにより終盤で自己開示が増えることに加え，深い自己開示が産出されることも，食べ物が個別に配膳され，相互に干渉しない銘々膳ならではの効果であると考えられる．

7. 総合考察

会話の分裂に着目し，会話の場を検討したところ，共食器形式において, 取り分け行為が第二の会話を産出したり，座席の離れたもの同士をつないだりする役割をしていた．こうした状況は多くの人と話す機会を得て，豊富な話題で他者と親交を深めたい場合に適していると考えられる．例えば，初対面同士での食事では相手との親密度を上げるためには，互いがどのような人物なのかを知り合う必要がある．高齢者同士が食べ物の話題によって日常生活，健康面の話など周辺的な話題からお互いの共通点や共感できる話題を見つけながら親密度を上げる場においては，共食器形式による食事の提供でコミュニケーションをサポートすることが可能であると考えられる

一方で，自己開示ついて高齢者らの発話内容を分析したところ，銘々膳の方がより多く自分に関する発話がなされていた．特に銘々膳形式においては食事の終盤において，自己開示量が増えた．結果 1 において銘々膳形式の場合，目の前の料理の話題が共食器に比べ少ないこと，共食器形式の場合，食事の終盤で皿に残った食べ物を取り分けるための話題が出る事例が確認された．それらの結果から，料理の話題よりもむしろ個人的な話をゆっくりやりとりする場が構築されやすいと考えられる．このように食事をする目的によって食事形式を変え，その食事形式の特徴を生かすことで，効果的にコミュニケーションをサポートする食事形式を提案することが可能であると考える．

ⓒ2019 Information Processing Society of Japan

8. まとめ

本稿は高齢者 6 人 1 組，計 4 組による銘々膳形式，共食器形式の共食会話から，食事形式がコミュニケーション行動に及ぼす影響を検討した．食事形式による会話の場の組織化に与える影響を捉えるため，会話分析のアプローチから会話の分裂に着目して分析した．さらに親密度を向上させることに貢献する会話形式を探るため，心理学的アプローチとして自己開示の発話量を分析した．食事に参与する人の会話行動を分析した結果をエビデンスに，それぞれの食事形式の特徴を以下の通り示した．

1）共食器形式は，取り分け行為が第二の会話を生み，インタラクティブな会話の場を生成する役割を持つ．

2) 銘々膳形式は，自己開示発話を引き出し，参与者同士の親密度を上げる役割を持つ．

なお，今回検討した食事形式による会話の分裂や自己開示発話の産出傾向は，高齢者に限るものでないと考えられる. しかし, 食事という日常生活に即したシーンにおいて，また栄養や健康に関心を持つ高齢者に対し，食事コミュニケーションの場のデザインは，今後ますます重要になってくるものと考える．今回の取組みでは，その一端を明らかにした．今後は視線や食事動作などの振る舞いを分析するとともに，心理評価と合わせた検討を進める．

謝辞

食事実験実施にあたり，公益社団法人白井市シルバー人材センター様，はな膳千葉ニュータウン店様には多大なるご支援を賜りました．ここに記し，深謝の意を表します．

本研究は，科学研究費助成事業基盤研究（C）18K0222 による援助を受けた．

参考文献

[1] https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf
[2] https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1_3_2.html
[3] 東京都北区ホームページ https://www.city.kita.tokyo.jp/choju/kenko/koresha/kenkozukuri/annai.html
[4] 東京都新宿区ホームページ https://www.city.shinjuku.lg.jp/fukushi/korei04_002045.html
[5] 松井順子，“高齢者の会食会の有効性に関する考察 ―事例調査を中心にして”，社会医学研究，Vol. 26，No .1，pp. 53-64，2008.
[6] 徳永弘子，武川直樹，木村敦，“共食会話における協力的なコミュニケーション行動形成の仕組み－聞き手はいつ食べ，いつ応答するのか―”，日本知能情報ファジィ学会誌「知能と情報」，Vol. 26，No 4，pp. 793-801，2014.
[7] Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. “ A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation” Language, 50(4), pp.696-735,,1974．H. サックス (著), E. A. シェグロフ (著), G. ジェファソン (著), S. サフト 翻訳協力 (その他), 西阪 仰 (翻訳) ，“会話分析基本論集―順番交替と修復の組織”，pp.19-36，世界思想ゼミナール, 2010
[8] Jourard, Sidney M.; Lasakow, Paul, (1958) “Some factors in self-disclosure”，The Journal of Abnormal and Social Psychology, Vol 56, No.1, pp. 91-98
[9] 大坊郁夫，安藤清志，池田謙一編(1989)「社会心理学パースペクティブ」第 7 章，誠信書房
[10] 高橋佳子，深田博己，“CMC における自己開示の生起過程に関する研究”，広島大学心理学研究 No.6, pp.87-101，2007.
[11] 竹内由美，“大学生の友人関係における自己開示と孤独感の関係”，心理相談センター年報，第 6 号，2010.
[12] 菅沼真樹，“老年期の自己開示と自尊感情”，教育心理学研究，45，pp. 378-387，1997.

ⓒ2019 Information Processing Society of Japan